

## 第5 主な財政指標の状況

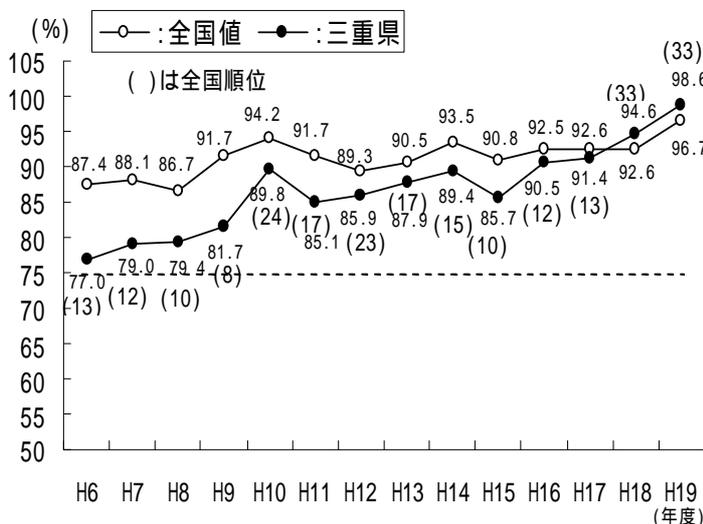
### 財政指標の推移（普通会計決算ベース）

地方公共団体が社会経済や行政需要の変化に適切に対応していくためには、財政構造の弾力性が確保されなければなりません。財政分析において財政構造の弾力性の度合いを判断する指標として、第20図に主な財政指標項目の推移を示しました。

なお、財政指標関連項目の状況については資料19に示したとおりです。

第20図 主な財政指標の推移

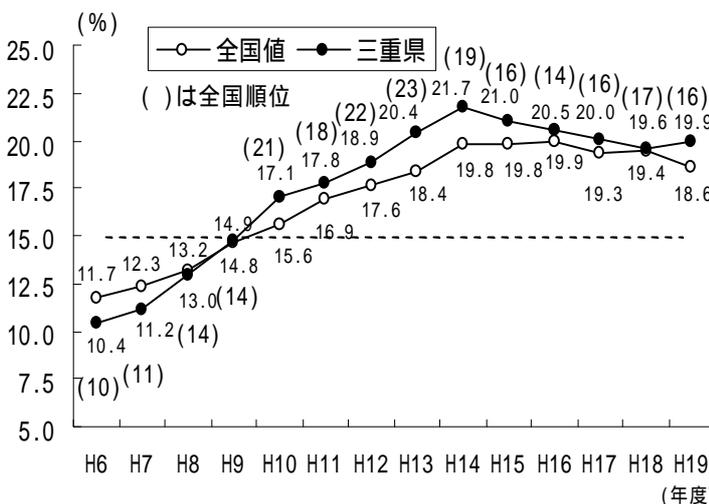
[第20-1図] 経常収支比率



経常収支比率は平成4年度以降ほぼ一貫して上昇し続けています。これは毎年経常的に収入される地方税の伸びに対し、人件費の上昇や公債費負担の増加等により毎年度経常的に支出される経費に充当される一般財源の伸び率が大きいことによるものです。

一般的には75%程度が妥当とされており、三重県は平成6年度以降、75%を上回っていると同時に、平成17年度までは全国値に対しては低い値で推移しているものの、よく似た変動傾向で推移しています。

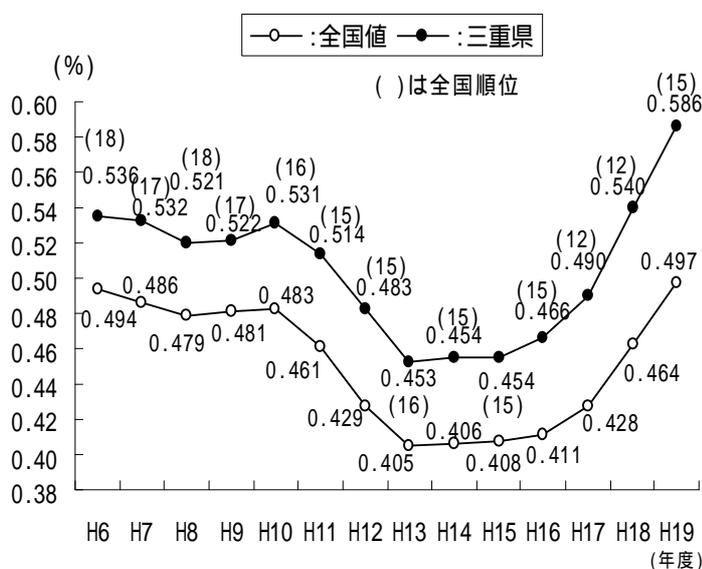
[第20-2図] 公債費負担比率



県債の元利償還金等の公債費負担比率は、平成4年度以降一貫して上昇し続け、平成15年度からは減少傾向となっていました。平成19年度は再び上昇しています。これまでの上昇は、毎年度増加し続けた公債費に充当される一般財源の伸び率が大きいことによるものです。

一般的には15%が警戒ラインとされており、三重県も近年、15%を越えた水準で推移しているとともに、全国値とよく似た変動傾向となっています。また、全国の自治体の財政状況は、本県と同様に厳しい状況にあると推定されます。

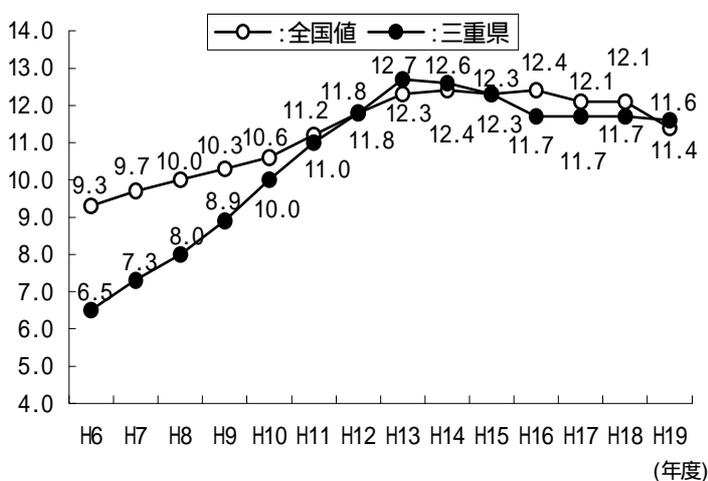
[第 20 - 3 図] 財政力指数 (3ヶ年平均)



財政力指数は財政力を判断する理論上の指数であり、三重県は平成 2 年度の 0.56 をピークに、その後全国値と同様に下方に推移していましたが、平成 16 年度から上昇に転じ、平成 19 年度には 0.586 となっています。

また、全国状況をみると、第 19 表のとおり、本県は B グループに属しています。

[第 20 - 4 図] 起債制限比率



起債制限比率は平成 4 年度から平成 13 年まで上昇し続けました。これは、公債費の伸び率が大きく、年々財政を圧迫してきており、現在もその状態が続いていることを示しています。

三重県、全国値とも、10%を越えた水準で推移しています。

## 財政力指数からみた本県の位置

第19表 財政力指数（平成17年度～平成19年度）

（単位：円）

財政力指数	所属団体	団体数	人口1人あたりの額				
			19年度		18年度		
			地方税	一般財源	地方税	一般財源	
A	1.000～	愛知県	1	177,893	178,583	-	-
B	0.500～1.000	神奈川県、大阪府、千葉県、埼玉県、静岡県、茨城県、栃木県、福岡県、京都府、広島県、兵庫県、群馬県、三重県、滋賀県、岡山県、宮城県、岐阜県	17	(133,707) 122,672	(203,027) 162,924	B1: 124,290 B2: (116,761) 101,804	B1: 155,787 B2: (210,017) 171,307
C	0.400～0.500	香川県、長野県、石川県、富山県、山口県、福島県、新潟県、奈良県、山梨県、福井県、愛媛県	11	113,967	228,451	101,726	226,113
D	0.300～0.400	北海道、熊本県、大分県、佐賀県、山形県、徳島県、和歌山県、青森県、鹿児島県、岩手県、宮崎県	11	94,877	244,024	87,675	241,238
E	0.300未満	沖縄県、秋田県、長崎県、鳥取県、高知県、島根県	6	81,907	267,824	75,615	267,498
F	1.31941	東京都	1	339,074	339,728	303,414	322,593

- （注）1. グループの編成は、17年度～19年度までの財政力指数（基準財政収入額／基準財政需要額）の平均値が1.000～をA、0.500～1.000をB、0.400～0.500をC、0.300～0.400をD、0.300未満をEとして区分したものである。
2. 東京都は、他の都道府県と行政権能、規模等著しく異なるので、Fグループとした。
3. 表示のグループは、19年度の区分である。
4. 人口1人あたりの額は、各グループの平均値で、（ ）内の数字は本県分を示したものである。
5. 一般財源は、地方税、地方譲与税、地方交付税及び交通安全対策特別交付金とした。
- （出典参考）  
「平成19年度都道府県決算状況調」による「平成19年度都道府県財政指数表」（総務省）

### 一口メモ

- 普通会計 個々の地方公共団体ごとに各会計の範囲が異なることを踏まえて、財政比較や統一的な掌握のために地方財政統計上統一的に用いられる会計区分であり、一般会計と、公営事業会計に含まれない特別会計を合算したものです。
- 経常収支比率（財政構造の弾力性を判断する指標）  
財政構造が弾力的か否か、財政の健全性が保持されているか否かの判断基準であり、歳出のうち、収入の増減に係わりなく支出を迫られる、経常的に支出されなければならない経費の占める割合を指します。一般的に、人件費や物件費等の経常経費の割合が大きく、また、それらの財源に国庫支出金、地方債といった臨時的収入が充てられる状態では財政構造が硬直化しており、柔軟な財政活動は期待できません。一般的には75%程度が妥当とされています。
- 財政力指数（地方公共団体の財政力を示す指標）  
財政力を判断する、理論上の指数であり、交付税算定上の基準財政収入額を基準財政需要額で除して求めます。この指数が大きいほど財源に余裕があるとされており、1を超える自治体には普通交付税は交付されません。財政力指数は、1に近いか1を越えるほど財源に余裕があるものとされています。
- 公債費負担比率（地方公共団体における公債費による財政負担の度合いを判断する指標）  
一般財源総額に対する公債費に充当された一般財源の割合をいうもので、これがどの程度一般財源の使途の自由度を制約するかを示すものです。この比率は、一般的に15%が警戒ライン、20%が危険ラインとされています。
- 起債制限比率（地方債の許可制限に係る指標）  
地方債の元利償還金に充当された一般財源のうち交付税措置される経費等を除外して算出される割合で、公債費による財政負担の度合いを判断する指標の1つです。